【巻頭言】

終刊並びに終焉の辞

―教育活動の一層の活性化に向けて―

西　一夫

信州大学国語教育学会の機関誌である「信大国語教育」の創刊は、一九九一[平成三]年一〇月である。これより継続的に刊行を続け、本三〇号をもって終刊を迎えることとなった。その経緯については、昨年度の総会において前会長である藤森裕治より会員に説明があったところである。

創刊号の冒頭には、私の二代前に国文学第一研究室におられた滝澤貞夫先生の「創刊の辞」が掲げられている。その冒頭には、本学会設立の経緯が次のように述べられている。

大学院修士課程の設置を機に、信州大学教育学部の国語科にも、遅ればせながら我々の学会が結成されることになりました。

つまり、大学院の設置に伴い、より学問的な研鑽を積む組織として結成された。大学院の院生は、学部から進学を希望するものや、現職教員として派遣されて研究を進めるもの、さらには外国人留学生など、さまざまな立場から構成されてきた。そうした成果の一端は本誌に掲載されている。詳細は本誌総目次を参照されたい。平成の初期に結成された大学院教育・研究の充実を目指した組織が、令和へと時代を移し、大学院の既存の研究科から専門職大学院へと本年四月に改組された。実践知と専門知との融合をはかりながら、専門職の教員養成へと変容を遂げた。この専門職大学院では、学校経営・教科指導・特別支援教育の大きなプログラムとなり、教科指導にかかわる領域に国語も位置付けられた。大学院の設置を契機に結成された本会が、大学院の大規模改組とともに幕を閉じようとするのは、庶幾の目的を遂げたと解することができるだろう。

本会と本誌も、時代の変化に適応できるように姿を変えてきた。投稿規定の整備や【研究論文】【研究ノート】【短信】などのカテゴリ作りなどもあげられようか。年に一度の大会では、同窓会的な役割も持たせてきたものの、教員の多忙化のなかで学外の参加者が減少してきた。そうした中で本誌が卒業生同士や在学生とを繋ぐことができる可能性として【短信】に在校生からの原稿を入れ

るなど、創刊号には見られない工夫を施してきた。さらに大会報告を掲載したことも工夫の一つと言えるだろう。このような工夫によって、紙面上で交流が持てたのであれば、誌面の工夫も意味があったと言えるだろう。本号をもって終刊を迎えるものの、誌面の工夫は終焉を迎えてはいない。何が変わったか、前号と是非とも較べていただきたい。

本誌の代表者は、次のような変遷を辿った。

創刊号から三号が京極興一、四号が山下宏、五号から六号が市澤要三、七号が堀井謙一、八号から九号が滝澤貞夫、十号から十二号が梅原恭則、十三号が市澤要三、十四号から十五号が山本清隆、十六号から十八号が益地憲一、十九号から二十九号が藤森裕治となる。

また、創刊号から本号までに掲載された論文（研究ノートを含む）は二〇〇篇を越えている。学部生の卒業研究や大学院生の学位論文をまとめ直したもの、所属教員の近時の研究成果、さらには卒業生からの実践報告等、三〇年間の変遷はあるものの、相応の稔りがあったことは確かである。このように本誌並びに本会は多くの国語教育に関わる教員、卒業生、在校生によって支えられてきた。

本会並びに本誌が終刊となることは、惜しむべきことではあるのだが、これまで積み重ねられてきた学術的な歩みが消滅してしまうことと同義ではない。本誌は本号までのすべての原稿が、本学の「機関リポジトリ」に登録されてＰＤＦで閲覧できる状態になっているのである。会員各位におかれましては、本会の礎を忘れることなく、さらなる教育活動に展開し、日本の教育が活性化することを強く願う次第です。

（にし　かずお　信州大学教育学部）